ロブノールの変

工 藤 広 忠

“Lob-Nor” is Undergoing Changes

Hirotsada KUDO

は し が き

本篇は、“羅布泊の変遷^{注1)}”(ロブノールの 変遷)”と題して、科学実験(1977年2月 科学出版社・北京)に掲載された朝暉(CHAOU-HUI)が記述した小報告を抄訳したものであるが、報告はその結論として、「此“遊移湖”的説法是不能成立的(もはやロブノールを“さまよえる湖”とよぶことは成立たないであろう),」と述べている。

この結論は“さまよえる湖”に限りないロマンをいなく人々の夢を空しくするであろうものであ

るが、これをそのまま受けとめるかどうかの判断は専門家にゆずるとして、私は本篇の標題を“ロブノールの変”とした。

なお、原著者朝暉の所属・専門等については明記されていない。

訳 文

さて、近時とみに脚光をあびている“ロブノール”は、新疆ウイグル自治区のタリム盆地にあるが、地質構造上盆地東端の拗陷^{注2)}(depression)の中心にあつて、別掲の地質図にみるように、地

ロブノール地質図

注1) Lobupo (中国音, 以下同)

注2) Aoxien

形は明らかに耳袋状（原文）をなしている。

湖辺一帯の地質時代は第四紀に属し、更新世後期から沖積世にかけて発達し、はげしい蒸発作用にともなって、あるいは河水に、あるいは北東風によって運ばれてきた多量の物質が湖辺に堆積している。

湖一帯の洼地^{注3)}（窪地）には、古来多くの湖沼が散在し、水量が豊富な時期には大湖を形成した。洼地東方の地殻は常に上昇していて湖を西方に圧迫している。

また、図にみる耳輪状（原文・耳殻の回りの円の意）の天然の堤をなす辺りは、一般に塩分、石膏を含む泥沙から成っている。

全般の露頭の状況から、この地域の地質を歴史年代別に表現すると、図にみるように、東方より西方に順次、先秦～前漢、東漢～随・唐、宋～元、近代と区分できる。

さて、現代のロブノールは、その水源の水量ならびに水の補給不足の影響を大きくうけている。

注 3) Wadi

解放以来、タリム盆地一帯は開墾の発展によって、灌漑に使用される農業用水が莫大な量にのぼるようになったため、湖（ノール）に流入する水量は極度に減少し、湖は萎縮の一途をたどっている。

かつて、ロブノールを“さまよえる湖”とする説もあったが、私共の現地調査や衛星写真等による観察の結果、周廷儒先生（CHOU-TING-RU）は次のように述べている。

「ロブノールは、湖盆内の移動は可能であるが、湖盆の範囲を越えて移動することは不可能である。

ロブノールを、“さまよえる湖”とすることは、もはや成立しないであろう。」

参 考 資 料

- 中華人民共和国地質図(400 万分の一)(1976) :
中国地質科学院編
中国の地理概況(1974) : 外文出版社篇、中国
国際書店

(1981年5月21日受理)